

ラヴェル バスク風ノ彩譜



出演者プロフィール



林 千恵子
メゾ・ソプラノ

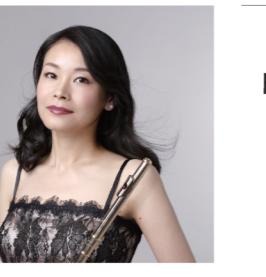


崎谷 直人
ヴァイオリン

桐朋学園大学卒業。1986年フランス音楽コンクール(パリ)オペラ部門第2位、並びに特別賞受賞。1993年フランス歌曲国際コンクール(パリ)でフォーレ大賞受賞。以降を本拠地とし、ヨーロッパ各地で現代音楽を中心とした演奏会で活躍する他、コンテンポラリー・ダンスや演劇作品とのコラボレーションにも積極的に取り組んでいる。アカペラ・ソロリサイタル「アペルギス&グロボカル」に対しサンターラー芸術財団「第11回佐治敬三賞」受賞。



吉岡 知広
チェロ
コーディネーター

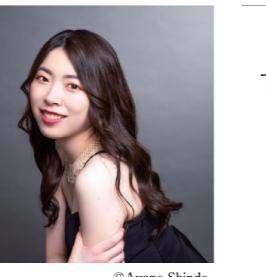


白戸 美帆
フルート

宮城学院女子大学を経て、パリ国立地方音楽院及びオルネイ・ス・ボア音楽院を満場一致の一等賞を得て卒業。フランスでの《Jeunes Espoirs》コンクール、びわ湖国際フルートコンクール、日本フルートコンヴェンションコンクール、仙台フルートコンクールについていずれも第1位。仙台フィルハーモニー管弦楽団、京都市交響楽団と共に演奏。現在、宮城学院女子大学音楽科、洗足学園音楽大学 非常勤講師。



北端 祥人
ピアノ



古内 里英
ピアノ

大阪府出身。第6回仙台国際音楽コンクール第3位など国内外において数多くの賞を受賞している。京都市立芸術大学およびベルリン芸術大学にて研鑽を積む。これまでにソリストとして仙台フィル、東京フル等と共演、室内楽奏者としても多彩な活動を展開している。現在、東京藝術大学弦楽科伴奏助手として後進の指導にあたっている。

千葉県出身。桐朋学園大学音楽学部卒業。在学時、成績優秀者による選抜コンサート、梅津学長推薦によるベーゼンドルファーコンサート、桐朋学園大学卒業演奏会、日本調律師協会新人演奏会等多数に出演。京都フランス音楽アカデミーにてスカラシップを受賞し、パリ・エコール・ノルマル音楽院に在学中。ブルー・リグド氏に師事。

ジョゼフ・モーリス・ラヴェル

ソナチネ 嬰ヘ短調

博物誌

マダガスカル島民の歌

ツイガース

ピアノ三重奏曲 イ短調

次回予告

第14回 シェーンベルク 月夜ノ愛ノ歌

2026年3月22日(日)15:00開演

出演

澤江 衣里(ソプラノ) / 石上 真由子(ヴァイオリン)
小林 壱成(ヴァイオリン) / 中恵菜(ヴィオラ)
山本 周(ヴィオラ) / 金子 邦亮(チェロ)
吉岡 知広(チェロ) / 居福 健太郎(ピアノ)

プログラム

ウェーベルン:弦楽四重奏のための緩徐楽章
ベルク:7つの初期の歌より「夜」
マーラー:リュックルト歌曲集より「私はこの世に忘れられ」
R.シュトラウス:4つの歌曲より「明日」
ウェーベルン:8つの初期の歌曲より「仰ぎ見て」
R.シュトラウス:4つの最後の歌より「夕映の中で」
シェーンベルク:浄められた夜(弦楽六重奏版)

2025年9月2日(火)よりチケット発売。

第14回とあわせた割引セット券(5,500円)も販売いたします!

仙台銀行ホール
イズミティ21
コンサートシリーズ イズミノオトモダチ

コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ“いいね！”してください。

URL: <https://www.facebook.com/izuminoootomodachi/>

仙台銀行



仙台銀行は、コンサートシリーズ「イズミノオト」への協賛を通して、地域の文化活動を支援しています。

2026.1.17 土

開演 午後3:00(開場 午後2:30)

仙台銀行ホール イズミティ21 小ホール
仙台市地下鉄南北線 泉中央駅北3出入口よりすぐ

[入場料]

全席 指定 3,000 円(市民文化事業団友の会料金 2,700 円)
※未就学児はご入場いただけません

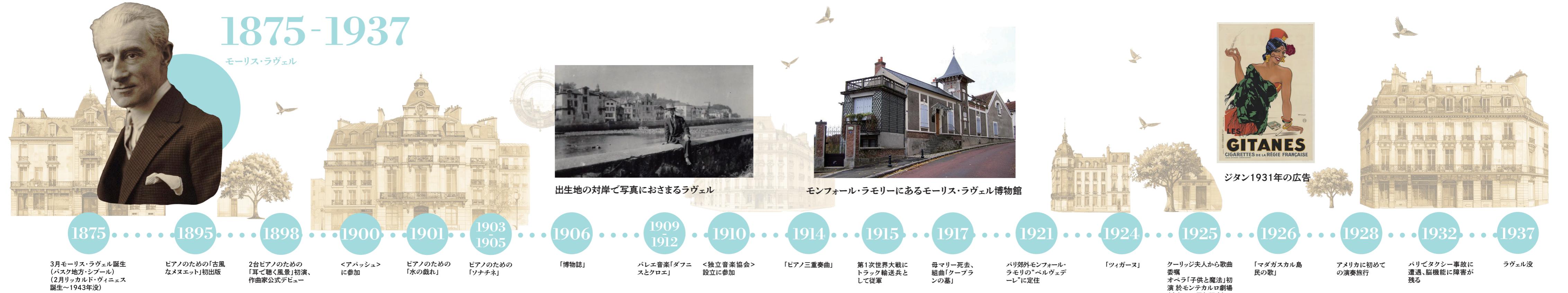
一般発売 2025年9月2日(火)

[プレイガイド]

仙台銀行ホール イズミティ21 | 日立システムズホール仙台
藤崎 | ローソンチケット (レコード: 26616)
仙台市市民文化事業団ウェBSITE (<https://ssbj.jp/ticket/>)

公演に関するお問い合わせ

仙台銀行ホール イズミティ21
TEL : 022-375-3101 (平日 9:30~17:00)
TEL : 022-375-1875 (平日 9:30~17:00)主催 公益財団法人仙台市市民文化事業団 | khb 東日本放送
後援 公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団
協力 日本音楽財團(日本財團助成事業)企画制作 仙台銀行ホール イズミティ21 | HAL PLANNING
協賛 株式会社仙台銀行 | 宝来産業株式会社
企画制作 仙台銀行ホール イズミティ21 | HAL PLANNING
協賛 株式会社仙台銀行 | 宝来産業株式会社



JOSEPH MAURICE RAVEL

序

今からちょうど100年前、1925年のラヴェルの手紙はとても興味深い。管弦楽作品のスコアの校正にかかりきりで他の作曲がストップしてしまい、関係各所にお詫び状を書き連ねているのである。オペラ「子供と魔法」のモンテ・カルロにおける同年3月21日の初演以後に、26年初めにパリ初演を控えていた。

エリザベス・スブレーグ・クーリッジ夫人に対して、「…この夏はあるたとお約束した2曲の『マダガスカル島民の歌』と約2年前から書いている『ピアノとヴァイオリンのためのソナタ』を終えるためにモンフォールを離れていません。しかしこれを断念せざるを得ません。この間ずっと、管弦楽譜の校正と、その後はパリ・オペラ・コミックにおいて1月23日に上演する「子供と魔法」のリハーサルの指揮に費やされたのです。約束を守れないことをどれほど後悔しているかお察しください。…遅れているだけに4月ごろには仕事に戻るつもりです。」(1925年12月19日付、telガリマール社出版「モーリス・ラヴェル書簡、執筆、インタビュー集」II/2031・部分抜粋)

フランス語は永い間、世界共通の法律用語であった。時制の表現の豊富さや言葉で書き表せないものはないと言わんばかりの理論的な書式を擁しているからである。そういうこともあってか、西欧の中でもフランスはとにかく手紙を交わすことが、人間関係にとってとても重要である。筆者も留学の初年度に、まだ年末にレッスンに行くのだからと勝手に構えて、師事した教授にクリスマス・カードを送らないでいたところが、12月に入つてすぐのレッスンで訪れた師のピアノの部屋には、すでに壁じゅうに門下生や知人親戚からのカードがところ狭しと貼られていた。カードを送らなかった無礼と恥ずかしさで冷や汗をかいた、にがい思い出である。

ラヴェルも実に筆まめであった。生誕150年記念に新しく書簡集が出て、出

版社デュラン社長とのやりとり、友人との意見交換、演奏会の感想や自身の活動報告などありとあらゆる事柄が多数の人との文通に書かれていて、読んでいるとラヴェルの生活が垣間見られて面白い。前出の手紙もその中の一つである。ブランクやドビュッシー、フォーレなども結構な分量が書籍にまとめられているが、今回のラヴェルの記念本は厚さ5センチ強のB6版全2巻で、特別ボックス入りという豪華版である。

眞のラヴェル

さて、そこにもしばしば吐露されているラヴェルの内面の話をしよう。ラヴェルは、几帳面で神経質な人だった。パリ郊外のモンフォール・ラモリに建てた終の住処「ベルヴェデーレBelvédère」(元々イタリア語で展望台)は、いわゆるおひとりさまのお城のようだ。現在は博物館として公開されている。

全ての居室が自らの趣味で飾られていて、ピアノの部屋には大好きだった母マリーの肖像画が中心に据えられている。シャイで皮肉やで、寂しがり屋

であったラヴェルは、愛する母を心の支えにしていたから、1917年に母が亡くなつた頃の憔悴は大変なものだったといふ。ラヴェルのピアノ椅子にすわると、温かく包みこむようにマリーが微笑みかけてくれる。

風呂場と洗面所は、黒白で統一されて、鏡の前に髭バサミなど顔を整える一式が綺麗に並ぶ。1937年に主人が亡くなつてから88年経つても、今朝ラヴェルがそこで髭を剃つたのではないかと思うほどその雰囲気は変わつていないし、そこにはまだラヴェルは生きているのだと思わせる空気が漂つている。

ラヴェルのこの几帳面さは、フランスとスイスの国境あたりを出身地とする父ジョゼフの鉄道技官としての緻密な仕事ぶりの氣質を受け継いでいるのである。音楽愛好家だった父は、ラヴェルの音楽への道をやさしく切り拓いた。

ラヴェルの音楽の源

ラヴェルはその名を冠した国際夏季音楽祭が毎年行われるフランス南西部の漁村サン=ジャン・ド・リュズからほど近いシブルーに生まれた。その建物が絵葉書にもなっているが、本当は出産のために故郷に帰るというバスク人の慣習があり、母が帰省中に、そのアバルトマンの管理人(コンシェルジュ)を務めていた姉(妹)のところに遊びに行っている時に産気づいて、その場でラヴェルを産み落としたという説もある。その出産の後、ラヴェル生後3ヶ月で家族はパリに赴いた。

母は、スペイン系バスク人であった。バスクといえばフランスとスペインを跨いだ独立した民族で、その血は濃く、同胞同士の絆は深い。そして舞踊もたくさんの種類が残っていて、今でも祭りには人々がござって踊り、楽しむ姿が見られる。

8月15日の聖母マリア昇天祭の日に筆者は当地を訪れたことがあるが、日本の祇園祭を彷彿とさせる山車が練り歩き、音楽や舞踊がそここの路地で披露されていた。

「ハイアライ」や「ベロタ」というスポーツ競技を楽しみ、黒や紺色のベレー帽をかぶっているバスク人たちの交流には、一方で即興的に語られる詩歌を音楽に乗せるという伝統があるといふ。その詩歌の韻律の一つに、13音節のシラブルで構成されるゾルティーコ・ツィキアがある。本来は「小さい即興詩」という意味を持つゾルティーコ・ツィキアであるが、実はゾルティは8と訳され、ちょうど「ピアノ三重奏曲」(1914)第1楽章のピアノで始まる序奏の、8分音符を基本にしたリズム、3拍+2拍+3拍がそれに当たる。そしてこの楽章がなぜ8分の8拍子という珍しい拍子表記なのかという謎がこれで氷解する。さらにこのリズム型の特徴として2拍目にアクセントが付くとい

うから、その冒頭部分はゾルティーコ・ツィキアそのものである。なお、ゾルティーコは「5拍子の踊り」と示す辞書もあるが、それは同曲第4楽章の4分の5拍子にぴったりで、ゆったりとした5拍子であるものの、バスク舞踊の拍子に基づいているのである。

これほど、バスク音楽が母の影響でラヴェルに染み付いて、色々な作品に用いられているということがお分かりいただけたであろう。

語る唄、彩譜

ピアノのための「ソナチネ」(1903-05)は、ラヴェルの心を許した友、イダヒシバ・ゴデブスキ夫妻に献呈され、非公開ではラヴェル自身とポール・ドゥ・レスタン夫人が続いて初演し、パリでは第337回国民音楽協会演奏会においてスコラ・カントゥルムのホールで同校の教授、ガブリエル・グロブレーズが公開初演した。「ソナチネ」の冒頭はラヴェルがとりわけ好んだ4度音程の下行で始まるが、下行した音が長い音価になっていて、2拍目にアクセントがあるというソルティーコのリズムの特徴がここにも現れている。

フランスのタバコ「ジタン」

一昔前は、青色の包装紙のジタンやゴロワーズをフランスの映画俳優が吸っているのがとても絵になったものである。今ではジタン(ジブシー)はロマと称さなければならぬし、タバコも肩身が狭くなっている。

そのジタン・ブルーの包装紙には、ロマの女性がぐるっと踊っているデッサンが描かれていた。そしてこれこそが、「ツイガース」のイメージである。そういえばビゼーのオペラ「カルメン」も主人公はタバコ工場で働いているという設定であった。

つまり「ツイガース」のイメージは、カルメンと思ってお聴きいただくのはどうであろう。筆者の持論としてはヴァイオリン独奏で始まるあの激しい冒頭

はロマ女性の感情の高まり、続いて現れる“バスクの歌”、そして目眩ぐ世界へと誘うようなビアの出現部分こそがバスクの女性の妖艶な内面なのではないか。

実は研究者によると、同曲初演者のハンガリー人ヴァイオリニスト、イエジー・ダラニから着想を得て、ラヴェルはハンガリーのロマの音楽性を取り入れていると言われている。確かに最初のゆっくりしたラップスと速いフリスカから成っていることと、本来はリュテラルという金属の装置をピアノに取り付けて金属的な音色を用いて、ツインバルのような効果を持たせていたことからも、ハンガリー風ということ一理ある。もちろんハンガリー風ラブソディとして聴くのも一興である。

若きラヴェルの内面的な心持ちや、4~50歳代の成熟の筆捌き、そして一生懸命バスクとの深いつながりが浮き彫りになる今回のプログラムを聴いて、生誕150年を演奏家とともに心から祝おうではありませんか。

なお、「ソナチネ」の調性も「ピアノ三重奏曲」の調性も、筆者はそれぞれ要へ調、イ調を推奨したい。なぜなら、ラヴェルの耳には旋法が響いていて、短調という調性は聞こえていなかったはずである。

野平多美(作曲家・音楽評論家)